

## 創業と守成

松浦 純子

魏晋南北朝の分裂の時代が終わり、久々に隋が中国を統一したが、三十年弱で唐にとつてかわった。唐は七世紀初めから十世紀初めまでおよそ三百年続いた王朝である。高祖李淵の時代はまだ隋末からの混乱が続き、次男である太宗李世民が第二代皇帝として即位するころにやっと国内を平定して統一を達成した。この皇帝の時代に日本は犬上御田鍬を第一回遣唐使として中国に派遣し、以後十数回にわたり留学生が中国の地を踏んだ。彼らが、日本の政治、仏教、芸術などに多大な影響を与えたのは言うまでもない。

太宗の時代は文化も発展し、後の時代に「貞観の治」と褒められたえられる太平の時代が訪れた。この皇帝について次のような故事が残っている。

太宗は創業と守成のどちらが難しいか家来に尋ねた。家臣の房玄齡は建国の時太宗と共に戦い、その苦勞を知っているので創業の方が難しいと答えた。別の家臣の魏徴は貞観の治を支えた人物で、世の中が安定するとそれを維持していく大変さを知っているので守成の方が難しいと答えた。太宗は、建国は既に過去のものとなったので、今は出来上がった国を衰退させないように守っていく方が難しいと結論付けた。いつまでも成功体験に浸っていては、あつという間に奈落に落ちてしまうという戒めである。事実、彼は皇帝自身を諫める役人を置いたほどである。

この例は意外と身近にあるのではないか。周りの状況や環境が変わったにもかかわらず、また同じようにすればうまくいくのではないかと安易に考えてしまう。よく例に出されるのが日本ではダイエーの失敗である。最近ダイエーの看板は見かけないが、どこかで頑張っているのか。アメリカの例ではリーマンブラザーズの経営破綻である。調子が良かった時のことが忘れられず欲を出して破滅した。

反対に、失敗体験は気が滅入るので余り思い出したくない。しかし、ここから学ぶことは多い。駄作ばかり書いていると言われないうちに書こう会から多くを学んでいこう。